

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520669

研究課題名(和文) 英語コミュニケーションにおける言語・身体・情動・方略の総合的研究

研究課題名(英文) A comprehensive study of language, gestures, emotions, and strategies used by Japanese EFL learners in English communication

研究代表者

泉 恵美子 (Izumi, Emiko)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10388382

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円、(間接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本人英語学習者がコミュニケーションを行う際に生じる挫折や故障の現象やメカニズムの解明を試み、言語能力・情動・身体・方略の関係を総合的に考察した。また日本人が英語母語話者と異文化間コミュニケーションを行う際に、アジア人と比べてどのような違いが見られるのかを調査した。

具体には英語でのコミュニケーションタスクや会話をICレコーダー、ビデオカメラを用いて録画したものを書き起こし、言語・身体の動き・方略の視点から分析すると共に、質問紙法により情意や方略使用などについて調査した。また、効果的な方略やジェスチャーの機能、L1とL2の関係やジェスチャーの有無が会話に及ぼす影響なども調査した。

研究成果の概要(英文)： This research tried to examine the phenomenon and the mechanism of the breakdown, failure and repair that arise when a Japanese EFL learner communicates, and considered synthetically the relation between linguistic competence, emotions, gestures, and strategies. Moreover, this investigated what kind of difference is seen compared with Asians when Japanese people performed intercultural communication with an English native speaker.

As data, communication tasks and pair conversation in English which participants performed were recorded with IC recorders and video cameras, and analyzed from the viewpoint of gestures, strategies and emotions. The questionnaire survey was also implemented. In addition, use of effective strategies, the function of gesture, and the relation between L1 and L2 and the influence of gesture into English conversation were investigated.

研究分野：外国語教育

科研費の分科・細目：コミュニケーション方略

キーワード：コミュニケーション方略 身体性・ジェスチャー 情動 スピーキングタスク 会話分析 異文化間コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

(1)日本の英語教育の目標と現状

平成 23 年度より小学校で新学習指導要領が完全実施となり、平成 24 年度より中学校で、平成 25 年度より高等学校で新学習指導要領が導入されることになった。そのいずれにおいても、コミュニケーション能力の育成が目標とされ、小学校ではコミュニケーション能力の素地、中学校では基礎、高等学校ではコミュニケーション能力をつけることが大きなねらいであり、更に解説では、コミュニケーションを継続発展させることの重要性が謳われ、困ったときやコミュニケーションがうまく行かない場合に方略をうまく使うように具体例を挙げながら述べられている。大学においても、文部科学省から発表された「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想 - 英語力・国語力推進プラン」(2002)と「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」(2003)の中でも仕事で英語が使える日本人を育成する重要性があげられている。しかしながら、実際に異文化コミュニケーションの場面において、日本人は沈黙や挫折が生じコミュニケーションが円滑かつ有効に進まないことがよくある。

(2)コミュニケーション能力と方略研究

コミュニケーション能力は Canale (1983) のモデルによれば、以下の4つの構成要素を持っている。1. 文法能力(語彙の知識や、形態論・統語論・意味論・音韻論の規則に関わる能力) 2. 談話能力(文と文との関係に関わる能力) 3. 社会言語学的能力(言語が使われる社会的状況の理解のための能力) 4. 方略的能力(会話が途中で途切れてしまうような場合にそれを回避するための能力)。Celce-Murcia, et al. (1995)では、コミュニケーション能力を上記の4つに加え機能的能力(言語機能を理解し用いる能力)も加えている。また Bachman (1990) は、「言語能力」と呼ばれる別のモデルを提案し、方略的能力を言語能力のまったく別の要素として定義し、話者の持っている背景知識とともに言語能力を使う際の最終決定に用いられる力だとしている。これらのコミュニケーション能力のモデルにおいて、いずれも方略的能力の重要性を述べており、コミュニケーション能力を育成する鍵であるといえる。

1970年代に始まったコミュニケーション方略(CS)研究に関しては、これまで Celce-Murcia, et al (1995)、Yule & Tarone (1997)など多くの研究者によって先行研究がなされ、相互作用的な中で、語彙の不足等を補うものとしての方略と心理

言語学的側面を扱った代表的なモデルがあるが、最近では Dornyei and Scott (1997) が、CSを「コミュニケーションの諸問題を補うための学習者の技術」であり、達成方略と回避方略の2つの種類をあげている。しかしながらその教授可能性や第2言語習得との関係等に関して見解が分かれており、今後更なる研究が必要である。

また国内では、岩井(2000)、Nakatani(2005、2006)、Fujio(2006)などによって日本人学習者のコミュニケーション方略と習得に関する研究が行われているが、実際の相互作用の中でオーラルコミュニケーションの挫折の原因に焦点を当て、日本人学習者の特徴と方略指導を詳細に研究したものは数少なかった。

(3)本研究の先行研究

著者はこれまで、教科書に扱われているCS(Izumi 1996)、日本人学習者のコミュニケーションの現状(泉、2005)、コミュニケーションタスクにおける挫折と修復(Izumi 2006)、日本人学習者と英語母語話者との自然会話における挫折と修復(泉、2006)、日本人学習者のプレゼンテーションにおける課題(Izumi and Okihara, 2007)などに注目し研究を進めてきた。またCS指導シラバスと評価システムを開発し実際に指導を行いその検証を行った。さらに、語彙レベル(言語能力)と方略能力の関係について注目し、語彙力とCSの関係から語彙力に閾値があることを発見し、またアジアの英語学習者(日本、タイ、中国)の小学生・中学生・高校生・大学生におけるコミュニケーションの意識とCS使用について比較調査してその特徴を探ってきた(Izumi 2009、2010)。

2. 研究の目的

本研究は、日本人英語学習者が英語でのコミュニケーションを行う際に生じる挫折や故障の現象やメカニズムを解明することを目的とする。また、英語での会話をICレコーダー、ビデオカメラを用いて録画したものを言語・身体の動き(ジェスチャーや視線など)の分析と質問紙法による情意の分析を行うことにより、個人の言語能力・情動・身体・方略の関係を考察し、日本人英語学習者がコミュニケーション能力を育成し、自信を持って外国人とコミュニケーションできるように指導し、評価するシステムを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

(1)日本人とアジア人の異文化間コミュニケーションの特徴を知るために、日本・タイ・中国・ベトナムの英語学習者が英語母語話者と会話をする際に、特に苦情や断り、

反対意見の表明などコミュニケーションが難しい状況でどのような方略を取るのかを会話の分析とアンケートで分析を行う。

(2)日本人英語学習者が英語を用いてオーラルコミュニケーションを行う際、どのような問題に遭遇してコミュニケーションが挫折するのか、またどのような方略を用いて問題の修復を図ろうとしているのかを質問紙法を用いて調査を行う。

(3)コミュニケーションの最中に困った状況になれば身体が大きく動いたり、タッピングや代償行為などのジェスチャーの使用や視線の動き、表情が変化することに注目し、非言語的方略に焦点を当て、コミュニケーションの特徴を明らかにする為に、英語の習熟度が異なる多くの被験者を用いてデータを収集する。その際、英語による会話をビデオカメラを複数用いて録画し、会話分析と身体の特徴の分析を行い、ジェスチャー(身体)と情動の関係、言語の習熟度と方略の関係を考察する。

(4)日本人英語学習者のL1とL2におけるジェスチャーや方略の使用に注目し、その類似点や相違点から言語と身体、情動の関係を探り、日本語と英語の違いから第二言語習得についても探求する。の知見からからの観点統合的にCSの特徴を解明し、指導と評価のカリキュラムを作成する。平成25年度には自然な状況の中で採録された日常会話のコーパスを活用し、日本人CS用のコーパスを作成し、CS指導カリキュラムを総合的に作成し、公開を行う。

(5)CSを言語学的・非言語学的両面から指導を行い、効果を検証する。

4. 研究成果

(1)小学校外国語活動、中学校英語、高等学校外国語(英語)について学習指導要領を調査し、コミュニケーション能力や方略、ジェスチャーなどの記述を取り挙げ、特に定型表現(formulaic sequences)に注目しまとめた。並行して、コミュニケーション能力と方略、異文化間コミュニケーション、言語と身体性、非言語コミュニケーション、ジェスチャーの役割、情動と第二言語習得について、先行研究のまとめを行った。

(2)日本・タイ・中国・ベトナムの英語学習者と英語母語話者との会話(苦情や断り、反対意見の表明を行うロールプレイタスク)を録音し、コミュニケーションが難しい状況でどのような方略を取るのかを会話分析と質

問紙法で分析を行った。それにより文化や母語により、文法的、社会言語学的、語用論的要因が異なること、並びに日本人学習者のコミュニケーションの特徴が分かり、指導をすることで、改善に繋がると考えられた。

(3)習熟度の差・タスクの差による方略の違いを調査するために、日本人大学生(英語力な中級から上級)を対象に実験を行った。Oxford Proficiency Testと語彙産出レベルテストを用いて習熟度を調べ、ペア活動をさせ、その会話をビデオと、カメラ、音声媒体で録音する。次に会話を文字化し、ペアでの会話(絵の並び替えのコミュニケーションタスクと故郷紹介)をビデオカメラとICレコーダーで録音し、会話を文字に書き起こし、つまずきの箇所を精査し、ジェスチャーなど非言語の特徴についても記載し、見られたジェスチャーを絵に描いた。また、タスク後インタビューを行い、うまく言えなかった点、ジェスチャーなどで気づいたことを聞き取り、原因と意図していた内容と、実際に行動の差について尋ねた。それらのデータから、習熟度やタスクと言語・非言語・情意面からの方略使用の相関を見、日本人のコミュニケーションの特徴をまとめた。

(4)ジェスチャーのコミュニケーションと言語習得における意義や役割について先行研修をまとめ、日本人英語学習者がペアでの会話の最中に用いるジェスチャーをタイプと機能別に分類し、どのようなジェスチャーを有効だと感じているかを調査しまとめた(表1&図1参照)。その際、認知的な言語要素のみならず、非言語コミュニケーションの特徴を解明し、心理言語学的手法を用いて、言語・情動・身体性・方略を総合的にとらえ人間のコミュニケーションのメカニズムをとらえることを試みた。

表1 ジェスチャーのタイプと例

1. 無意識的な動き(話し手と聞き手)	身体の一部(顎・鼻・頬・髪)に触れたり、指や腕を組むなど
2. 理解を伝える(両者)	うなずく、首をかしげる、笑う、ほほ笑むなど
3. ビート(話し手)	指で拍子をとる
4. 語彙の視覚化(話し手)	指や両手で物の形を表すなど
5. 語彙検索(話し手)	手を回転させたり、円を描く、目を上下に動かすなど
6. 物の指示、表象(話し手)	自分や他者や物を指や手で示すなど
7. 数を数える(話し手)	指で数えるなど
8. 情動の表象(話し手)	こぶしを作ったり手を上げたり身体を前方に出す



図1 会話の最中に見られたジェスチャー

注：うなずき／顎に手をやる／首をかしげる／何かをつかむふり／指を上げたり下ろしたりする／広げる／物の形を作る／翌年の意味／比較級・最上級の表現／「眠る」の動作／適語が分からない時／走る動作／煙が上がる／指でリズムを取る／形を表現／数を数える／指を鳴らす／方向を示す／物のサイズや大きさを示す／否定する／当惑したしぐさ／自分を強調／腕を組む／歩く動作／間違いを示す

(5) 日本人大学生（英語力は中級から上級）を対象に、ペアでの自由会話（これまでの喜怒哀楽を伴う体験について話す）を英語と日本語で実施した。会話はビデオカメラとICレコーダーで録音し、会話を書き起こし、ジェスチャーなど非言語の特徴についても記載すると共に、情動が日本語と英語で異なるのか、L1（日本語）とL2（英語）で方略やジェスチャーに違いが見られるのかを分析した。先行研究でもL1とL2の仕組みの違いや習熟度の違いでジェスチャーにも違いが見られるとあり、先行研究との比較を行った。また、タスク後インタビューを行い、うまく言えなかった点、ジェスチャー・情動などで気づいたことを聞き取った。それらのデータから日本人のコミュニケーションの特徴を言語習得、ジェスチャー、情動の点からまとめた。

(6) 日本語と英語の差、ジェスチャーの有無による差を調べ、言語・身体・情動・方略の関係をより詳細に記述するために実験を行った。日本人大学生を対象に、これまでで最も記憶に残っている出来事について、ペアで会話を行わせたが、その際、日本語と英語、ジェスチャーの有る場合と禁止された場合

(4パターン)で、会話がどのように異なるのかを比較した。会話は、録音・録画したものを書き起こし、どのようなストラテジー、ジュスター、情動が見られるのかを分析した。また、事後にペアでの会話についてリフレクションを書かせると共に、質問紙を用いて日本語と英語の会話の違い、ジェスチャーの有無や役割についても尋ねたが、日本語と英語で共通点や相違点などが見られた。また、ジェスチャーを用いて言葉を補ったり、情動を動かし、相手と共鳴しながら会話を進める傾向も見られた。およそ人のコミュニケーションの心的イメージと概念図は図2のように考えられる。

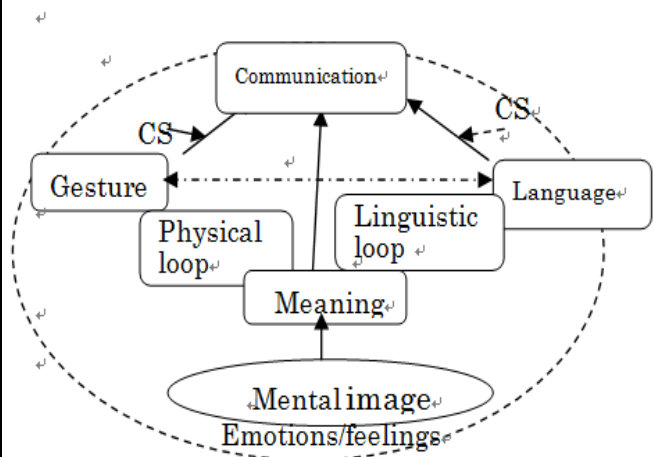


図2 人のコミュニケーションの概念図

(7) コミュニケーション方略の明示的指導のためのタスクを開発し、モニタリングやリフレクションの手法を取り入れメタ認知方略を用いた授業での指導を実践した。

上記のように、コミュニケーション方略を言語・身体性・情意面から総括し、国内外の学会で研究発表として報告すると共に、論文に投稿し、図書にもまとめた。これらの成果は、小・中学校の英語学習初期の学習者や、英語が苦手なスローラーにとって大きな成果が期待できると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計4件)

IZUMI, Emiko (2013) Gestures, Emotions, and Strategies Used by Japanese ELF Learners in English Communication. *THE JASEC BULLETIN*, 22, (1), 97-112. 査読有
 泉 恵美子(2012)「アジア人英語学習者にみられるコミュニケーション方略：拒否・反対に関する一考察」*THE JASEC BULLETIN*, 21 (1), 33-46. 査読有
 泉 恵美子(2012)「CEFR、新学習指導要領における方略とフレイジオロジー」『京都教育大学教育実践研究紀要』12, 165-174. 査読有

泉 恵美子(2011)「日本、中国、タイの英語学習におけるコミュニケーションへの意識と方略使用」*THE JASEC BULLETIN*, 20,(1), 65-79.査読有

[学会発表](計9件)

IZUMI, Emiko (2014) *Instruction and evaluation communication strategies to develop learner autonomy*. AILA Annual Conference. 2014年8月、オーストラリア・ブリスベン.

IZUMI, Emiko (2014) *A Study of Communication Strategies, Gestures and Emotions Used by Japanese EFL Learners: Focusing on differences between L1 and L2*. AAAL Annual Conference, Portland 2014. 2014年3月22日、米国・ポートランドマリオットホテル.

泉 恵美子(2013)「オーラルコミュニケーションの指導と評価：方略的能力の観点から」英語授業研究会関西支部研究会. 2013年5月25日、大阪商業大学.

IZUMI, Emiko (2013) *Communication strategies, gestures and emotions used by Japanese EFL learners in L1 and L2 interaction*. Asia TEFL Annual Conference. 2013年10月27日、フィリピン・マニラ大学.

泉 恵美子(2013)「ペアでの会話における方略・情動・ジェスチャーに関する一考察：英語と日本語の場合」全国英語教育学会北海道研究大会. 2013年8月10日、北星学園大学.

泉 恵美子(2012)「日本人英語学習者のコミュニケーションに見られる方略、ジェスチャー、情動に関する一考察」全国英語教育学会愛知研究大会. 2012年8月5日、愛知学院大学.

IZUMI, Emiko (2012) *How do Japanese EFL learners use gestures, emotions and strategies in communication?* Asia TEFL Annual Conference. 2012年10月4日、インド・リーラケンピンスキーホテル.

IZUMI, Emiko (2012) *A study of gestures, emotions and strategies in English communication*. IATEFL 2012 Annual Conference. 2012年3月22日、英国・グラスゴー国際会議場.

泉 恵美子、山本 玲子、米崎 里(2011)「小中高大の連携のある授業ができるか？連携のためのFirst step」大学英語教育学会関西支部40周年記念大会. 2011年11月27日、武庫川女子大学.

[図書](計3件)

泉 恵美子(分担執筆)(2013)『第2言語習得研究と英語教育の実践研究』開隆堂出版. 330頁. p.81-94.

樋口 忠彦、並松 善秋、泉 恵美子(編著)(2012)『英語授業改善への提言 「使

える英語」力を育成する業実践』教育出版. 285頁.

森山 卓郎(編著)泉 恵美子(分担執筆)(2012)『教師コミュニケーション力 場面別・伝え合いの極意』明治図書. 115頁. p.96-97.

6. 研究組織

(1)研究代表者

泉 恵美子 (IZUMI, Emiko)
京都教育大学・教育学部・教授
研究者番号：10388382